金剛新東江添遺跡予備調査報告

昭49・5・31　　立山町文化財保護調査委員会

1. 遺跡の環境と現況

金剛新東江添遺跡は栃津川中流域右岸にあり、昭47富山県遺跡地図に98番として登載されているものである。立山地帯を水源とした栃津川は渇水期には著しく減水する反面、豪雨の際には直ちに増水はんらんし、水害をもたらす。そのはんらん原は中流域では常願寺川の中位段丘（下段面）を侵食して形成されている。

遺跡はこのはんらん原より一段高位の段丘縁辺や隆起した旧はんらん原の上に存在しているようである。当遺跡は今までは資料が乏しく不明確な点の多い遺跡であった。

立山町中部の圃場整備事業が進行し工事が遺跡近辺にまで迫る段階に至り、遺跡の処置をどうするかが緊要の問題となった。一方昭48年度に施行された隣接地（中下野町線道路の南側）の一部から多くの遺物が表採され、遺跡が道路の南側にも広がっていたことが明らかになった。既に破壊された地域からの主な表採品はつぎのようなものである。

- 土器類
  - 貝殻腹縁文や太沈線文、葉脈状文など縄文中期末葉のもの。
  - 三角形刺突文や撚糸縄文など縄文後期初葉のもの。
  - 玉だき三叉文、その他縄文晩期初葉のもの。など。
- 石器類

  打製石斧、磨製石斧、小型磨製石斧、石錘、石鏃、大珠など。

2. 調査の経緯

昭和49年度圃場整備工事を控えての緊急調査である。県教委の指導にもとづき　遺跡地の範囲と遺跡の性格の手がかりを得るための予備調査である。

5月18・19日に実施した。

3. 調査の概況

(1) 調査区域

中下野町線道路を起点として段丘崖を含む50m巾(0～D)の地域を北方に向け、金剛新集落まで200m(1～20)にわたって調査区域を設定した。方10mの区画を設け、一区画内で一地点ずつ方1mを掘り下げた。第1図で◎△×を付した地点がそれぞれ44か所になった。

(2) 土質層序

この地域の土質はつぎの3型に類別することができる

ア：標準型

Ⅰ層：表土（耕作土）
　　灰褐色細砂土

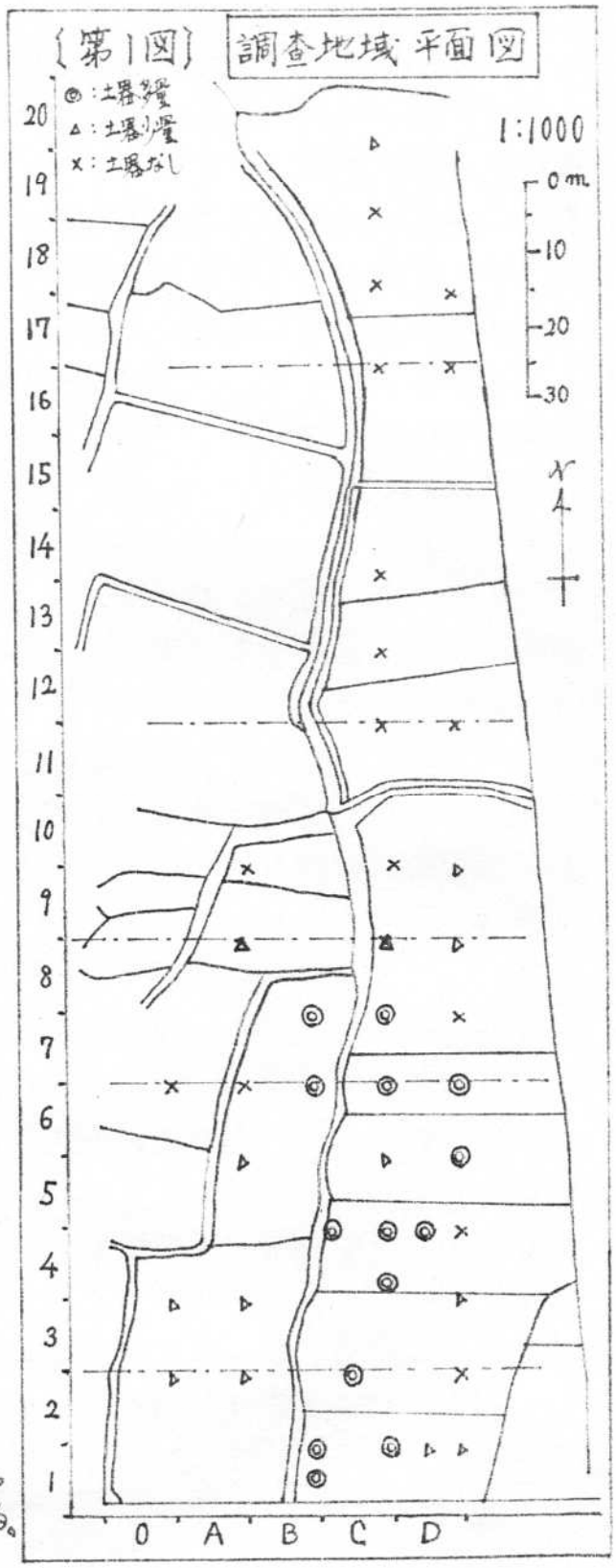
Ⅱ層：赤褐色細砂土（鋤床）

Ⅲ層：黒褐色細砂土。土器包含層となる。

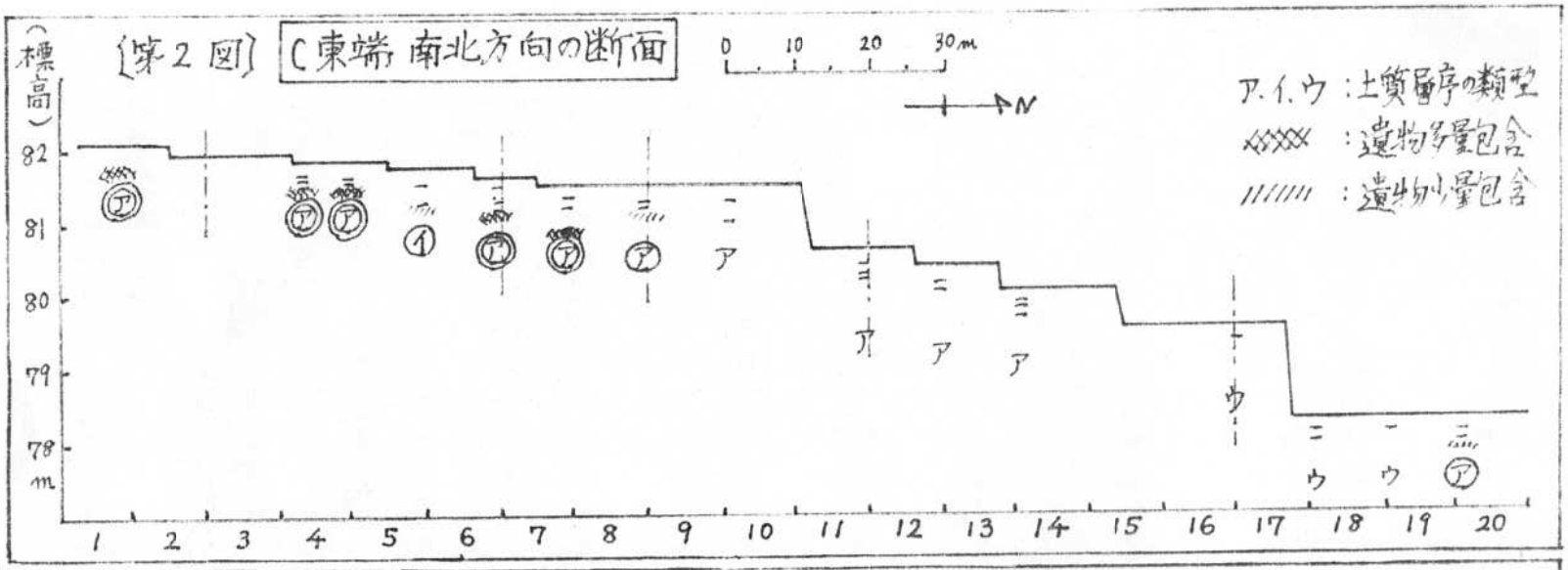
Ⅳ層：黄色砂礫土（基盤）

イ：Ⅱ層とⅢ層の間に混合層をはさむ型。かって圃場整備をした水田。混合層の下に更にⅠ・Ⅱ層をかむこともある。

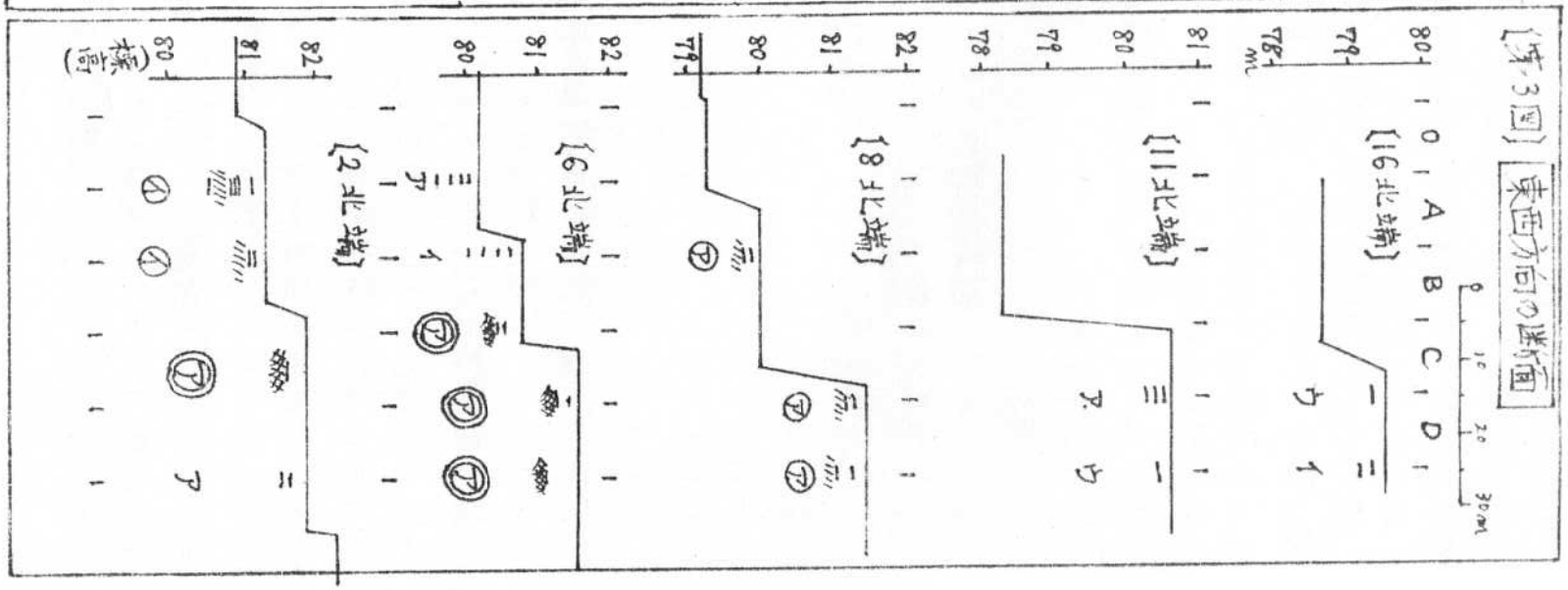
ウ：Ⅱ・Ⅲ層を欠き直ちにⅣ層。比較的新しい水田と思われる。



【第1図】調査地域平面図



〔第2図〕C東端 南北方向の断面



〔第3図〕東西方向の断面

(3) 特記的な出土品

今回の調査は、包含層に至れば中止し、遺物は原則として採り上げなかったので 特記する物も少ない。

- B1地点（東端部）
  深さ60cmで遺構包含層。晩期初葉土器片多数。打製石斧、石錘、凹石、石冠半製品、滑車型耳栓など遺物多い。
  ※この地点は事前試掘地点である。
- O3地点（東北端）
  深さ25cmより赤色凝灰岩製の岩偶？出土。この土層は移動している。（イ型）
- D6地点
  深さ60cmより晩期初葉の三叉文土器片。
- B7地点（イ型）
  小型磨製石斧。かなりの土器片や石棒片、木炭片など出土。
- D8地点
  土器はまれである。Ⅲ層中から爪形文のあるせんい土器が1点出土した。

4. 所見

(1) 遺跡は、第1図に◎を付した範囲を中心として存在している。起点道路から北方へ70～80m、巾30m余り、面積約25aである。
調査区域の北端C20で土器片の出土をみたが、現集落と複合している遺跡が別にあることを推定させる。

(2) 遺物や遺構の包含層は25～80cmの間にあるようである。

(3) 調査区域からの出土遺物は ほとんどが晩期初葉のものと思われる物であるが、既に破壊された南接地域に連続した遺跡とみられるので、中期～晩期の複合遺跡の可能性が強い。またD8地点から出土したせんい土器片は一点であるが、年代巾をさらに広げる可能性を予想させるものである。（以上文責安田）